

何がコミュニティ・人を育むのか



栄養学科准教授 浅田 豊

地域社会には様々な図書館がある。現代には解決すべき課題も多く、その知的な部分での社会基盤を担う役割は重要であるからである。子どもたちの心を育む読書センターとしての機能、あるいはカリキュラムに寄与する学習支援の場としての学校図書館。人と人をつなぎ、自己変革へのきっかけづくりとなる可能性も考えられる公民館図書室という場。そして、豊かな知識・教養を共有しながら、市民生活・職業生活・まちづくりを支える一つの基礎となる地域の図書館など。

そういった中で、本学のような大学図書館の今日的役割は何か。静かな気持ちで活字や資料、即ち専門的な学習・研究と向き合うことに加え、人々が出会い交流し、新しい発見・創造へとつながっていく。そのような機会は大学の図書館にはないだろうか。あるいは多様な文化的価値意識に基づき、相互に人的資源となり、学問的ひらめきを与え合えるような学術交流の拠点。このような役割も、根源的なニーズや状況に応じてではあるが、潜在的に期待されるのではないだろうか。

その背景には、一つには高校と大学の違いがある。両者は社会貢献の意欲や豊かな人間性の涵養という重要な共通性を持つ。一方で、高等学校までは主として既に解明

された知識や技術の習得を土台として、探究的発展的な学習・研究・諸活動へと学びを深めていく。教師からの明示的指導またはヒドゥンカリキュラムとしての間接的な効果がそれを支える。そして生徒同士が成長し合い共に高め合っていく側面がある。他方、高等教育においては専門的な知識・技能を身に付け、未だ解明されていないことを自由に独立して研究・学習・議論していく。いわば学修のコミュニティとしての性質がある。無論、教材・文献に基づく計画的な自己学習・研修が不可欠である。

もう一つ。人はどのようにして学ぶのかという視点で、社会全体を広く見てみたい。まずは日常生活の種々の刺激の供給を受けて、学習行動を見つめていくという姿勢があるだろう。次に、自分のなかの認知の変容を感じ、自律的に省察へとつなげていく過程。さらには、学習者自身が新たに経験したことを自分自身の中に反映させながら、知識の意味自体を問い直し、構成しなおしていく場面もある。そして、実践的なコミュニティに参画し、相互作用の中に身を置き、新たな知識を自己管理的に身に付けていくプロセスもまた、近年重要視されつつある。まさに置かれた状況・場における学習効果である。

社会には様々なコミュニティがある中で、学修を主とするコミュニティとはどういうものだろうか。まずはお互いの存在を認め、信頼し、受け入れることから始まるであろう。気が付いた場合には助言し合う関係がそこに存在する。特定の人々が常に指導役になるよりも、誰もが先生役、ファシリテーター役、生徒役になりうる関係性のほうがここでは適合する。そして、他者の頑張り、創意工夫を参考にし、相互に吸収し、模範にし合う。また、例えば利用可能な参考文献を紹介し合い、手段を分かち合う。ときに、悩みを共通化し、励ましにより気持ちを支え合う。こういった過程を経て、成功体験・失敗体験、さらにはやればできるという実感や、計画の失敗に対し前向きに意味をとらえなおす発想をも相互に共有することも可能となる。自己学習が重要であると同時に、コミュニティの中での学びも重要である。

大学においても、社会においても、コミュニティが人を育み、人がコミュニティを育む。両方の側面が考えられるであろう。コミュニティや人に、有効な学びの場を与える図書館。生涯を通じ、一人ひとりの学びを育成・支援・演出していく図書館。本や人、企画という新たな出会いを楽しみにして、これからも大いに活用していきたいと考える。

